

ニクラ修道院の宝である聖母子のイコン。1694年、21日間にわたって聖母の目から涙が流れたという



サブンツァ村での機織りの様子。スタンク氏のご家族が協力してくださった

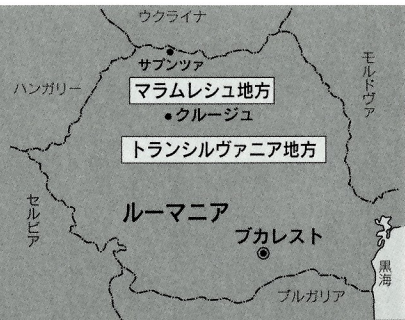


ヒツジの放牧地はかなりの急斜面である。羊飼いたちは杖を休息ばかりでなく獣を追い払うためにも用いる



そくそくと集まる巡礼者たち。村ごとに教会の旗を立て聖母をたたえる歌を口ずさみながら到着する

ニクラ修道院の全景。山の中腹に修道士たちの生活する建物と屋外礼拝所、教会堂が並び建つ



聖母マリアとヒツジたち

地球を集める

新免 光比呂

(しんめん みつひろ)

本館民族文化研究部



一九九五年夏、文部省(当時)の「在外研究若手派遣」によってルーマニアに滞在中のわたしは、トランシルヴァニア地方の都市クルージュで本館から派遣された四人の海外映像資料取材チームを迎えた。取材チームの目的は、ビデオテープ用番組および「もの」の広場「展示のためにルーマニアの映像資料を作成すること」であった。そのため、以下四つの主題を定めて撮影することとなった。まず聖母マリアのイコンが涙を流したとされることで知られ、またガラスイコンの製作の中心地として有名なニクラ修道院の聖母就寝祭。次にマラムレシュ地方サブンツァ村における機織りと生活。第三に、ウクライナ国境に沿ったマラムレシュ山地の夏の放牧地における羊飼いの生活。第四に伝統的民族文化の宝庫といわれるマラムレシュ地方の村々における生活の変化である。

通信手段の不備と気質の違い

わたしの滞在は四月にすではじまっております。取材チームが到着するまでには大体の段取りができていた。しかし、撮影取材の期日はほぼ四週間と限られているのに移動の距離は数百キロメートルにおよぶ。当然、細かなスケジュール調整が必要である。ところが、当時ルーマニアにおける通信手段はお粗末なもので、電話がまったくもって役に立たない。最初に撮影する

一日の撮影が終わわり、みなが眠りについて夜も更けたころ、突然、羊飼いたちが杖を手に山小屋を飛び出していく。外では牧羊犬たちが狂ったように吠えだす。しばらくして戻ってきた羊飼いの人たちに何が起きたのか尋ねると、こともなげにオオカミがクマが来たという。夕方、撮影隊のテントの周りにどう猛な牧羊犬をつないだのはクマが来るからということだったが、それが本当になってしまった。

放牧地での羊飼いたちの生活は厳しい。早朝から深夜までヒツジの世話、チーズ作り、追われる毎日である。食事も単調で楽しみにかける。しかし、羊飼いたちはじつにさわやかで気持ちの良い男たちだった。とくに牧童頭はたくましく決断力に富み、ユーモアにあふれていて、取材のあいだもいつも笑わせてくれた。

放牧地での撮影が終わわり、われわれはサブンツァ村の機織りとマラムレシュ地方の生活の撮影のために村に戻った。そしてある日、村の路上でヒツジを山からつれて戻った彼らに偶然再会した。ヒツジの首に付けた鈴をならしながら、群れは村のなかを抜けていく。すると突然「Să trați, domnului Hiro. (うきげんよう、ゴロヤン)」という声が響き渡る。なつかしい牧童頭の声である。わずか二日ばかりの取材で生活をともにしただけだったが、何故か胸にせまるものがあった。

ニクラ修道院はクルージュから自動車で一時間半のところだったが、電話の通話状態が悪く、ひどいときにはつながらないので、細かい打ち合わせのために出かけていく必要があった。さらにマラムレシュ地方との電話連絡もよく聞かなくて、夏の放牧地に関する打ち合わせやサブンツァ村での機織りをどのようにするか詳細を詰めることがむずかしかった。結局、正確さを期してわざわざマラムレシュまで足を運ばざるをえなかった。

問題は、通信手段ばかりではない。われわれと現地の人びとの気質の違いも撮影の段取りに反映した。たとえば、ニクラ修道院での聖母就寝祭の撮影の際には、行事がどのように進行するのか、なかなかつかめなかった。修道院の関係者に進行について質問するのだが、わたしの理解力の不足か、いったい何時にどこでミサがあり、説教がおこなわれるのかわからない。後に何時何分という質問が無意味であることを学習するのであるが、それはまた別のことだった。進行がわからないままに巡礼の人びとは増え続ける。結局、撮影の三日間、ひたすら修道院の内外を次に何をしておくのか尋ねながら走り回ることになった。

放牧地での出会いと事件

一方、国境沿いの夏の放牧地の撮影では、すばらしい体験をさせてもらった。

忘れられない人びと

終わってみれば、戦場のような四週間だった。今とは違い、貴重な撮影機材はかさばり重い。一六ミリの撮影フィルムで撮影できるのは一本のリールで五分だけ。そのリールをとり替えるには、撮影の進行中でも光を遮る袋のなかに手を入れ手探りでフィルムを交換しなければならぬ。二人のカメラマンの方たちは大変な重労働をしてくださったように思う。また音声も担当した制作の方も撮影のたびにカメラを追いかけられるばかりでなく、ブカレストからの往復を含めて一〇〇〇キロメートル以上の運転しなければならなかった。さらにプロデューサーの方は取材の混乱のなかでもスタッフのストレスをうけとめながら撮影の方向を導いてくださった。

現地の多くの人びともお世話になった。トランシルヴァニア民俗博物館館長ティベリウ・グラウル氏、シゲット民俗博物館館長ミハイ・ダンクーシ氏、ニクラ修道院長ボップ師、イラリオン司祭、カンア又司祭、夏の放牧地ではベトロ氏、サブンツァ村ではドウミトルとイリナのスタンクご夫妻、ウオグダン・ウオーダ村ではマリシユ一家に助けて頂いた。撮影から一〇年以上がすぎたが、一人一人の顔は今も忘れられることができぬ。